



みどりの風

平成25年11月5日発行
校報 第502号
(みどりの風 第45号)
練馬区立関町北小学校

リスペクト アザーズ

校長 大野 泰弘

以前、本校のある保護者の方が校長室にお見えになったとき、私は、その方から一枚の記事を手渡されました。

そこに印字されていたのは、「平成24年度 第32回 全国中学生人権作文コンテスト 法務大臣賞」を受賞した中学生の作文でした。タイトルは「リスペクト アザーズ [respect others]」。この作文コンテストは、生徒の人権感覚を高め、人権尊重の精神の重要性や必要性を理解してもらうために、昭和56年から行われているものです。その内容の一部を以下に紹介します。

僕は、日本人の両親を持ちながら、アメリカのサンディエゴで生まれて、十歳半まで生活し、地元のデイケア(保育園)、プレスクール(幼稚園)、小学校に通った。その中で出会った先生たちが何度も口にした「respect others」という言葉は、今も僕の行動や考え方に大きな影響を与えている。

サンディエゴは、ロサンゼルス南にあり、メキシコの国境から1時間程度だったので、土地柄のせいも、クラスには、肌の色も髪の毛の色も本当にいろいろな人種の人たちがいた。僕が物心ついたときには、周囲にいろいろな人種の人たちがいるのが当たり前の状況だったので、自分が周りの人と違うことも当然だと思っていたし、それに対して深く考えることもなかったように思う。どこの国でも同じだと思うが、集団生活が始まると、誰かが意地悪をしたとか、誰かがいじめられたとか、いわゆる人間関係のトラブルが起こってくる。そんなとき、先生たちは必ず「リスペクト アザーズ」と言い、当事者に反省を促した。「リスペクト」の意味もはっきり分からない保育園や幼稚園のころから、事あるごとに繰り返したとき込まれた。日本語にすると、「他の人のことを尊重しなさい」というような意味なのだが、今思うと、「意地悪をしないで、みんな仲良くしなさい」とか「いじめはダメ」という、そのときの行動を注意するのではなく、その行動を起こしてしまった根本の考え方を問題にしていることになる。(中略)

その後、僕は日本の小学校に通い始めた。周囲のみんなのおかげで生活にはすぐに慣れたが、同時に大きなカルチャーショックも受けた。一番驚いたことは、みんなが他の人と大きく違わないように、なるべく同じようになるように非常に気を遣っているように見えたことである。他人よりうまくいかないから目立たないようにしているのではなく、他人よりうまくできても目立たないようにしているように感じた。僕は最初のうち、そのリガわからず、今まで通り、自分がうまくできたことを周りの人にも伝えていたら、「それは自慢だ」と言われて、何とも悲しい気持ちになった。また、友達同士で相手の気持ちになれば絶対言えないような侮辱するようなひどい言葉を言い合っている中、「冗談」と言っとうやむやにしていることにも驚いた。僕がよく分からない世界だった。僕がたたき込まれていた「リスペクト アザーズ」の世界はここにはなかった。(中略)

僕は、日本でもっと「リスペクト アザーズ」が浸透していけばいいと思う。日本は表面上差別のない社会なので、必要ないと思われるかもしれない。しかし、これこそが人権を考えるうえでの基本だと思う。人権尊重の社会をつかっていくのは、僕たち一人一人の考え方によるからだ。同じ人間は一人もいない。人と違うことがまたその人の個性である。違う点だけでなく、うまくいったこと、できなくても努力していくことなどを尊重し合っていくことができれば、もっと素晴らしい社会になっていくと思う。〔鎌倉市立御成中学校 3年 坪井 洸さんの文章より一部抜粋〕

人種のるつぼでありながら、一人一人の個性を尊重することで人間社会を形成しているアメリカ合衆国の話、ではなく、「リスペクト アザーズ」の考え方は、我が国においても、また子どもたちの社会においても大切にされるべき考え方です。「他者を尊重できない子どもは、自分自身のよさも大切にできない」と言われます。自分の考えや意見と違うからという理由で、友達を排斥したり敬遠したりしては、豊かな人間関係を築くことには発展しませんし、自分自身を高めることにもつながりません。

11月になり、練馬区では「ふれあい月間」として、「いじめ撲滅シンボルマーク」の作成に取り組みますが、本校でも9日の道徳授業地区公開講座をはじめ、「いじめ防止」の授業を道徳の時間等に行ったり、「楽しい学校生活にするためのアンケート」をとったりして、子どもの心に寄り添い、温かい人間関係を築く一助にしていきたいと考えています。

ご家庭におかれましても、この機会に「リスペクト アザーズ」の精神について話し合われてみては如何でしょうか。